

# 「妻が夫に望む時期的なニーズと夫婦関係満足度との関連」

## — 家族ライフサイクルの視点から —

屋代剛典

### 1. 問題と目的

個人、夫婦や家族としてのライフサイクルから、結婚により夫・妻として、妊娠・出産により父・母親としての役割を獲得により、夫婦、家族としての関係を変化させていく。家族ライフサイクルの時期に特有な発達課題やそれに伴う危機は、家族成員の問題行動につながり、夫婦関係や親子関係が悪化して家族崩壊に至る危険性がある。

近年、女性の社会進出にともない、社会の変化により、結婚、出産後も働く女性が増加し、育児や家事の負担は、大きくなり、子どもの成長時期によって、負担が異なり妻の夫婦関係満足度の低下に関連すると考えられる。

これまでの夫婦研究では、育児、家事の負担が多い乳児期の子を持つ夫婦や夫婦間コミュニケーションを問題視する中年期夫婦の二つの時期についての研究が多くみられる。時期的に分断され、あまり扱われてこなかった学童期、思春期の子を持つ妻に焦点をあて、夫婦関係満足度を乳児期からの継続的な推移にも着目した。夫婦関係満足度を規定する要因の夫婦間コミュニケーション、夫の家事参加、夫の子どもへの関わり、夫の精神的なサポートについて、家族ライフサイクルの視点から乳児期、学童期、思春期の末子を有する妻を対象として、夫婦関係満足度との関連から、妻が夫に望む時期的なニーズを明らかにすることを目的とした。

### 2. 研究方法

#### (1) 調査対象

本研究の対象者は、核家族で夫婦がともにフルタイム勤務と育児、家事の負担が多く、援助が夫に限定される子どもを有する既婚女

性とした。子どもの区分は、末子が乳児期 155 名、学童期 118 名、思春期 112 名の計 385 名であった。夫婦関係満足度、夫婦間コミュニケーション、夫の育児家事、妻への精神的なサポート、それぞれの尺度を用いて測定した。さらに、妻が夫に最も望む家事、子どもへの関わり、精神的なサポートについても具体的に調べた。調査は、インターネットにより、2016 年 11 月 2 日から 12 月 14 日に実施した。

#### (2) 方法

夫婦関係満足度とそれを規定する要因との関連性を検討するため、使用する尺度の因子分析、信頼性の検討を行い、さらに妻の夫婦関係満足度を目的変数とし、夫からの精神的サポート、夫の家事参加態度、夫の子どもの関わる態度、夫とのコミュニケーション態度を説明変数として、ステップワイズ法重回帰分析を行った。

### 3. 結果

因子分析の結果から、コミュニケーション (Co と略す) 尺度は、「Co 日常的な報告」、「Co 相手の対応の認知」、「Co 要望や不満の伝達」、「Co 不満の率直な表明」の 4 因子となった。各因子の信頼性係数も .77 以上と高い信頼性を確認した。子どもが乳児期、学童期、思春期の子どもを持つ妻の「夫婦関係満足度」とそれを規定する要因を子どもの時期別にステップワイズ法重回帰分析した結果から、乳児期では夫の「精神的なサポート」( $\beta = .67$ ,  $p < .001$ ), 夫の「子どもに関わる態度」( $\beta = .16$ ,  $p < .01$ ), 「Co 日常的な報告」( $\beta = .13$ ,  $p < .05$ ), 学童期では夫の「精神的なサポート」( $\beta = .57$ ,  $p < .001$ ), 「Co 相手の対応の認知」( $\beta = .26$ ,  $p < .01$ ) 「夫の家事参加態度」( $\beta = .12$ ,  $p < .05$ ),

思春期では夫の「精神的なサポート」( $\beta = .62$ ,  $p < .001$ ), 夫の「子どもに関わる態度」( $\beta = .29$ ,  $p < .001$ ) が「夫婦関係満足度」と有意な関連性を示した。3つの時期に共通して強い関連を示したのは、夫からの「精神的サポート」( $\beta = .57 \sim .62$ )であり、その内容を調べると、乳児期で「心配事や悩みを聞いてくれる」、学童期で「感謝をしてくれる」、思春期で「体調の気遣いをしてくれる」となり時期により異なっていた。

妻が夫に「最も望むテーマ」は、乳児期、学童期、思春期において共通して、「子どもへの関わり態度」であった。各時期で内容を調べると、乳児期では「子どもの遊び・趣味・スポーツの相手」、学童期では「子どもとのコミュニケーション（会話）」、思春期では「子どもの学習や進路などの悩み・相談への対応」であった。子どもの発達の時期によって、妻が夫に望むニーズが異なることが示された。また、注目する点として、妻が夫の望む態度としての調査から、夫婦間コミュニケーション、夫の家事参加、夫の子どもへの関わり、夫の精神的なサポートの質問において、「特になし」の項目が、乳児、学童、思春期と子どもの年齢、妻の年齢、結婚年数の増加に伴い上昇傾向を示していることである。

#### 4. 考察

本研究は、妻の「夫婦関係満足度」に有用な夫の精神的サポート態度と「妻が夫に望む時期的なニーズ」とは異なる結果となったが、妻へ精神的なサポートを夫が直接行うことは重要であり、また、妻が夫に望むニーズで最も多かった「子どもに関わる態度」は、夫が子どもに関わることで子どもを介して、間接的に妻の夫婦関係満足度を高めることにつながると考えられた。さらに、妻は子どもの成長、結婚年数の経過とともに、夫の家事参加、子育て・子どもの躾や教育の参加、精神的サポートに期待しないことが増加していくこと

は、夫婦間コミュニケーションにより、妻から夫へ不満や要望を伝えていないことにつながり、それは妻の夫婦関係満足度の低下に反映するものと考えられた。

#### 5. 総合考察

本研究において、妻が夫へ望むニーズは子どもへの関わりが多くみられた。子どもが乳児期では、遊び相手のような物理的ニーズから思春期には進路相談といった精神的なニーズへと子どもの発達により内容が推移していることが明らかとなった。昨今の晩婚・晩産化により、子育て夫婦は多様化し、従来の年齢や結婚年数で夫婦関係を捉えていくより、子どもの発達によって親への負担度が変わることは、夫婦関係満足度に影響を与え、家族ライフサイクルの視点から捉えることに意義があると考えられた。夫は、妻や子どもとのコミュニケーションから、父親としての役割の推移を捉え実行していくことで、妻の期待に応え夫婦、家族関係の維持や安定化が図られ、家族ライフサイクルの時期に特有な発達課題や問題に対峙した際、夫婦、家族の在り方や枠組みを柔軟に対応していけると考えられた。この結果から、夫婦、家族を対象とした心理臨床場面への有用性が示唆された。

#### 引用・参考文献

- 諸井克英(1996) 夫婦満足度尺度 堀洋道(監修) 吉田富士夫(編) (2001) 心理尺度集Ⅱ 一人間と社会のつながりを考える(対人関係、価値観)サイエンス社, p149-152.
- 野末武義 2009 家族ライフサイクルを活かす—臨床的問題を家族システムの発達課題と危機から捉え直す— 精神療法, 35(1), 26-33.
- 多川則子 2006 日常的コミュニケーションが恋愛関係に及ぼす影響 社会心理学研究, 22 (2) 126-138.